中央アジアの梵語仏典

湯山　明

はじめに

中央アジアという呼称は、歴史地理学の上で、かならずしも明確な境界をもつ地域を指すものではない。内陸アジアといい、西域といい、陸のシルクロードといい、すべて同じことであろう。インド亜大陸および東南アジアのインド文化圏を除いた地域に限定しても、問題は解決されない。

本稿が、将来の研究の発展を期待しての書誌学的な報告を意図するものであってみれば、地域を狭く限ることよりも、他の地域で新たに発見された資料の情報にも、経典成立史・原典批判などに関心をもつ学徒の注意が惹かれよう。

一つ例を挙げれば、ランカー島に遺る梵語典籍、とくに大乗（Vetullavāda）の仏典伝承については、どちらかというと過小に評価され看過されてきた感があるが、今後この方面の研究の進展が期待される。[1] こうした中で、アヌラーダプラ（Anurādhapura）のヂェータ林園（Jetavanārāma）の発掘現場から、つい最近（一九八二年十二月十八日早朝に）土中より発見されたポーティー型の純金六葉（総量約二キログラム）は、九世紀頃のシンハラ文字で雕られた般若経典の断片（ca. 63.5×5.8×0.57 cm）で、[2]

当時の大乗経典供養の一証左としても、興味深い出来事であった。[3] 該経典の比定・校合が、鶴首して俟たれる。

なお、大陸部の東南アジア山岳地帯に、梵語仏典が、たとえ断片的にも保存されているのではないかとの期待があるが、現状ではほとんど全く知る由もないのが残念である。

中国の雲南省一帯の調査が進むと、いま謂われている照葉樹林帯文化圏での仏教の伝播の解明にも、光があたることになろう。一九八二年に、与えられたほんの束の間に、筆者も二三の梵語仏典資料を昆明で実見したことがある。ことに仏頂尊勝陀羅尼を筆頭に多くの真言陀羅尼や般若心経なども、悉曇系梵字で彫られて、碑文として今日に伝えられている。[4] その仏教文化の流入経路を、ビルマ経由・チベット経由あるいは漢族の影響とみるかなど、[5] 歴史的にも複雑で、速断は慎しむべきであるが、インド的要素の東漸は否定できまいし、将来の課題としてきわめて興味深い。[6]

元代に至ると、チベット系仏教と共に中国の中原に移入されたランチャ（Laṅ-tsha, Raṅja）文字が、広く流行して用いられるようになり、さらにくだって十七世紀末から十九世紀にかけての、北京の諸仏寺の印経院の出版活動には、目を瞠るものがある。いわゆる北京町版の誕生である。就中、一七一二年創立の嵩祝寺などは有名である。[7]

北京町版の中には、梵蔵両語文を並記した仏典もあり、仏教梵語文献学の上からも貴重である。[8] 旧帝政ロシヤ学士院などは、真先にかかる資料の蒐集に努めた。[9] その後、多くの学者や研究機関も集めたが、チベット文献の目録に載って、[10] インド仏教学徒の注意をあまり惹かなかった嫌いがある。たとえば、オーバーミラー（E.E. Obermiller 1901—1935）の仏母宝徳蔵般若波羅蜜経の梵蔵原典の校訂本（Leningrad 1937）は、第二次大戦後、覆刻出版されるまで、入手不可能であったが、彼が用いた底本は、ほかならぬ北京町版のみであって、世界に現存する数点のうちの二本は、日本に将来保存されていたのである。[11] 間違いなく北京町版と思われる、同経の梵本の小破片一点を、筆者は一九七九年に訪れた吐魯番県展覧館に見出して驚いた。知る限り唯一の梵本木版本を、シ

ルクロードのオアシスの町で、眼のあたりにしたからである。写真撮影は許されず、意気銷沈して帰国してのち、偶然にも日本でその写真を見つけて驚喜した。[12] 同展覧館では、ベゼクリック千仏洞で出土した、八思巴（'Phags-pa）文字の元代の仏経印本との説明書きがあったが、九十度向きを変えれば、紛れもなくランヂャ文字であり、時代も下った北京町版の類であろう。不完全な断片の僅か十二行の文中に、意味・韻律上からも正しい唯一の異読の見出せることからも、貴重なものである。

ヒマーラヤ山系の南岳地帯から、今後も重要な写本の新しい発見が、期待できるようになってきた。すでに多くの貴重な資料が、研究者の机上に載ったが、[13] さらに将来の展望も明るさが増している。[14]

ついでながら、写本を含めて人類の文化遺産の発見と保存は、緊急事であるが、信仰篤い仏教徒の理解を求める、慎重な努力も忘れてはならない。多くの時間と根気が必要である。十分な見識をもった日本人の物心両面の援助が、期待されている。

わが河口慧海（一八六七～一九四五年）が、一九一六年に、チベットの舎魯普（Shālu, Źva-lu Ri-phug）寺から日本に将来した、一〇七〇年十月十二日の日付入れの梵文法華経[15]をはじめとした写本類、サーンクリティヤーヤナ（Rāhula Sāṅkṛtyāyana 1893—1963）の厖大な調査報告からしても、[16] チベットが仏教梵語典籍の一大宝庫であることは疑いない。北京の民族文化宮の図書館に、相当な数にのぼる梵語仏典の写本が、チベットから将来・保管されているといわれる。中でも、サキャ（Sa-skya）寺から将来されたとされる、一〇八二年の日付のある貝葉写本は、謂う所のクティラ（Kutila）文字で書写された、完全な法華経梵本で、[17] きわめて保存の状態がよく、複製版の近刊が予告されている。

チベットでは、いまだに数多くの僧院などで、貴重な写本が保管されていると伝えられている。大いなる文化遺産が、人類共有の宝物となることを願って止まない。写本類の中には、唯一つのみ存在を知られる写本の報告があって、すでに半世紀も眠らされているものもある。たとえていえば、ハリバドラ（Haribhadra）の宝徳蔵般若に対する注釈書（貝葉写本）が、然りである。[18]

梵語仏典研究の端緒

外交官ホジスン（Brian Houghton Hodgson 1800—1894）は、カトマンドゥに駐在するや、直ちに当地の文物に興味を抱き、一八二四年頃には、梵語仏典の蒐集を始め、一八二七年から写本類を、各地の研究者や研究機関に寄贈・譲渡した。一八二八年に公刊された、彼の二論文は、西欧のインド学徒に、大きな衝撃を与えた。[19] 西欧の学者が、梵語の位置について、ジョーンズ（William Jones 1746—1794）から、大きな衝撃を受けてのち僅か四十年のことである。[20]

ほとんど時を同じくして、ハンガリア人チョーマ（Csoma Sándor-Alexander Csoma de Kőrös 1784—1842）が、チベット文献を精力的に調査していた。彼の律蔵に関する業績を、ウィルスン（Horace Hayman Wilson 1784—1860）が、はじめて世に問うた。[21]

シナ学の分野では、レミュザ（Jean Pierre Abe Rémusat 1788—1832）やジュリアン（Stanislas Julien 1799—1873）が活躍して、漢訳仏典の存在を世に知らしめた。

ビュルヌーフ（Eugène Burnouf 1801—1852）は、一八二六年に、ラッセン（Christian Lassen 1800—1876）と共に、パーリ語の研究書を公刊した。インド学仏教学の知識を吸収しながら、蔵漢仏典の存在を知り、さらには梵語仏典の発見の報告をみて、ビュルヌーフは驚き喜んだ。彼はホジスンに書簡を認める決心をし、一八三四年七月七日にはじめて筆を執って、仏陀（釈迦）の書が梵語で存在するのを知った満足を、感激的に綴っている。[22] 彼の要請で、パリのアジア協会に、二十四点の梵語写本が届いたのは、一八三七年四月二〇日頃であった。[23] ビュルヌーフは、こと細かに研究状況をホジスンに書き送った。彼は近代仏教文献学の基礎を築いたといえよう。[24]

このように仏教梵語文献学の構築は、はじめに着実な出発を見せたといえよう。（西欧の研究史については、稿を改めてくわしく論じたいと思う。）

探険家の梵語仏典蒐集

いわゆる中央アジアに、さまざまな目的をもって、足を踏み入れた人の記録は古く、枚挙に暇がない。

第二次世界大戦の後、中国およびソヴィエト連邦の学者が、国境を隔てて、中央アジアの学術調査を進めてきたが、梵語仏典などの発見について、それぞれの報告を追うのは、きわめて困難な状況にある。[25] いずれにしても、仏教が想像以上に広範な地域に、宣布されていたことが知られる。[26] 今後すみやかに、仏典資料の報告や研究が、公刊されるのを期待したい。旧帝政ロシヤ時代の資料については、若干知ることがあるが、近半世紀の状況を知りたい。[27] たとえば、トゥルクメニスターン共和国のマルギアーナ（Margiana）地方（東経六〇度・北緯三八度付近）から、説話集や有部の戒律書（?）など一五〇葉にも及ぶ樺皮写本が出土したと、報告されている。[28]

十九世紀初頭から第二次大戦までの、近代的な意味での探険家をとっても、相当な数にのぼる。[29] その中で、仏教文献学史の上から見逃すことのできない、主要な探険家・探険隊の名を挙げてみよう。この頃までには、ネパール系写本が、すでに数多くヨーロッパに知られていた。[30]

バウアー写本　バウアー（Hamilton Bower 1858—1940）が、一八九〇年三月初旬に、庫車（Kučā）付近で入手した、ポーティー型の樺皮写本は、広く「バウアー写本（Bower Manuscript）」と呼ばれているが、実は大孔雀明王経などを含む七種の写本で、四世紀後半に書写されたものと、調査を委嘱されたヘルンレ（A.F. Rudolf Hoernle 1841—1918）は、詳細に論じている。[31] たとえ書写された場所が、インドであったとしても、中央アジアの仏教遺跡から梵語写本の出土したことは、研究者や探険家にとって大きな驚異であり、与えた衝撃と刺激はきわめて大きいものであった。[32]〔その後、たとえ小断片たりとも、たとえまた随行者たりとも、発見・入手した人の名を冠して、写本を呼ぶ習慣が長らく続いた。——その後、入手地・保管地を名称に用いることもあり、実際に書写された土地と混同されて紛らわしいとする学者もいるが、コータン本などというと、特に西欧語でいえば、書写された言語か土地か、却って混乱を招く。ほとんどの場合は、通称の方が便利であるともいえる〕。

ヘディンの探険　時を同じくして中央アジアをはじめて訪れたヘディン（Sven Hedin 1865—1952）は、探険隊

を組織し、一八九三—九七年、一八九九—一九〇二年、一九〇五—一九〇九年、一九二七—三三年、一九三三—三五年と、二つの大戦で足止めさせられながらも、広範な調査行を成し遂げている。もともと地理学者であったヘディンは、文献の蒐集にはあまり興味を示さなかったようで、かなりの蒙古文仏典をストックホルムに将来したが、梵語仏典については、少なくとも蒐書目録などを目にしたことがない。しかし、彼もまた、その徹底した調査を通して、多くの研究者を育て、自身も多数の著作を公刊し、各国語に翻訳されているし（日本には全集にもなっている）、資料の調査報告は数十冊に及び、しかも未だに刊行されているなど、[33] 他の学者や探険家に与えた影響は測り知れないものがある。

デュトルィユ・ドゥ・ラン　次の驚くべき発見は、一八九二年にデュトルィユ・ドゥ・ラン（Jules Léon Dutreuil de Rhins 1846—1894）が、グルナール（Joseph Ferdinand Grenart 1866—?）と共に、コータン（于闐・和田）で入手したといわれる巻子本型の樺皮写本である。その片割れが、一八九七年に、露都のオルデンブルグ（Sergei Fedorovič Ol'denburg 1863—1934）の許に、ペトロフスキー（註27参照）から届いた。法句経の断片であった。その言語は、ガンダーラを中心に、広くコータンやクロライナ（楼蘭）にまでも公用語として通用していたといわれ、ベイリー（Harold W. Bailey 1899—）教授が、ガンダーラ語（Gāndhārī）と名付けたものである。[34] この法句経の、精緻きわまる校訂本を出版したブラフ（John Brough 1919—1984）が、いわゆる発見・研究史を詳論している。[35] ついでながら、発見場所は、玄奘のいう瞿室餞伽（Gośṛiṅga）[36] 山の僧院趾で、グルナールの記述から、スタインが比定・実見している。[37] この言語資料は、ダルド語（Dardic）群など北西部の中期インド語の研究上からも重要であるが、[38] 仏教文献学・文化史上も看過できない。[39]

スタインの業績　ブダペストに生まれ、独英に留学して、英国籍を得、カーブルに客死した探険家スタイン（Mark Aurel Stein 1862—1943）は、正鵠を射た報告書や旅行記を数多く世に送り、中央アジアの考古学研究史の上で、特記するに値する。[40] 公的に第一回の調査（一九〇〇—一九〇一年）で得たインド・イラン語系の写本類も、

かなりの量になる。彼が一九〇〇年の暮に、はじめて写本を自分の手にした時の感激的な描写は、読者の胸を打つ。[41] それはコータンの東北方向の、東経八一度・北緯三七度五〇分辺りのダンダーン・ウィリク（Dandān Uiliq）地区の仏教寺趾であった。その地から発見された写本類は、ヘルンレの協力を得て整理されている。[42] さらに、真東の東経八四度付近のエンデレ（Endere）地区の遺跡からも、かなりの量の写本類が出土し、同様な報告がなされている。[43] ニヤ（Niya）地方では、この種の写本類は、入手していないようである。

スタインの第二回中央アジア探険は、一九〇六年から一九〇八年の二年七か月に及ぶもので、その時に入手した写本類は厖大な量にのぼったが、[44] この間の最も劇的なものは、敦煌文書であろう。[45]

第三回の探険（一九一三―一九一六年）も、甘粛からタクラ・マカン沙漠全域の広範なものであった。

スタインが、中央アジアから将来したインド・イラン語系仏典の白眉は、法華経の貴重な梵本断片を含んで、[46] 多量の出土品を見たコータンの東方百十数キロのドモコ（Domoko）地区のカーダリック（Khādalik）近辺の遺跡（東経八一度一二分・北緯三七度五分付近）であろう。[47]

カーダリックおよび他の地域から出土した多くの断片類の目録を、ヘルンレが作製して、一九一八年、その死の直前に、スタインの許に届けた。この目録が、トーマス（Frederick William Thomas 1867―1950）によって、校合・公刊されたのは慶ばしい。[48]

ヘルンレの貢献　ヘルンレは、すでにこの道で一家を成していたので、スタインから委嘱されたもののほかに、一九〇七年にカシュガールの総領事マッカートニー（George Macartney 1867―1945）や同所に駐在のマイルズ（P.J. Miles）などから一九〇三～四年に送り届けられた資料を、当時第一線で活躍中のヨーロッパの学者の協力を得て、一書にまとめあげて公刊し、[49] 中央アジアの古典籍研究の範を垂れたが、続刊に着手しながら他界して、ついに第二巻は未だに世に出ていない。

今世紀初頭以来、多くの学者が、中央アジアの仏教典籍の研究を力説しながら、行末も知れず、未整理・未比定のままになっている資料も数知れないのが実情である。この労多くして功少なき基礎仏教学の分野に挑戦する学徒の輩出を、更めて期待したい。わが渡辺海旭（1872―1919）は、在欧中に、原典比定の労を惜しまなかったことが、他の学者の論文などからも知ることができるし、この分野の彼自身の報告には、きわめて簡にして要を得た好論文がある。[50] 前掲のヘルンレの編著書で、仏典が南条目録[51]によって分類されている点からも、影響の程が知られよう。

ドイツの中亜探険隊　仏教梵語文献学の上から、もっとも大きな業績を残したのは、プロイセン王国の派遣した中央アジア探険隊であろう。第一回目は、一九〇二年から翌年にかけて、グリュンヴェーデル（Albert Grünwedel 1856―1935）を隊長に、若くして没したが多才のフート（Georg Huth 1867―1906）隊員と、技術屋としてのみでなく他の多くの特異の才能を買われて全四回に参加したバルトゥス（Theodor Bartus）が随行した。調査がトゥルファン地域であったために、ドイツのトゥルファン探険（隊）（最初は Königlich Preussische Turfan-Expeditionen, その後 Die vier deutschen Turfan-Expeditionen）と呼ばれるようになり、その蒐集品を Turfan-Sammlung とか Turfan-Funde と称することになった。仏教以外のものの存在を重視したドイツ探険隊は、次に一九〇四年から翌年にかけて、フォン・ル・コック（Albert von Le Coq 1860―1930）を選んだ。これに続行した形で、一九〇四年から翌年まで、グリュンヴェーデルが再び加わり、第二回目に調査をコムル（Qomul）まで伸ばし、三回目は更にクチャとカラシャル（Karashar）をも調査区域に入れて、一九〇五年末から一年半近くを中央アジアで過した。第四回目は、グリュンヴェーデルが抜けて、一九一三年六月から翌年二月まで、クチャとマラルバシを調査した。

ドイツ探険隊は、美術史に造詣の深い学者が先導し、ベルリンの民族学博物館の研究者も影響を受けて、蒐集・調査に力を注いだために、仏教説話など文献学の上からも、無視できない資料（およびその報告）の多いことを、つけ加えておきたい。[52] この伝統は、現在のドイツのインド学界にも、綿々と受け継がれてきている。

スタインは、主にタクラ・マカン沙漠の南側に重点を

置いたが、ドイツのトゥルファン探険隊は、天山南麓を中心に活躍した。

ドイツ探険隊の調査で、世界のインド学仏教学界を驚かせたのは、梵文劇曲の最初を飾る馬鳴(Aśvaghoṣa, ca. 2c.)作の舎利弗物語(*Śāriputra-Prakaraṇa*)(九幕)とほか二作の貝葉写本断片であろう。[53] 恐らくは、フォン・ル・コックが、一九〇六年一月に、大きな感激をもって、庫車の西方の Ming-öi (明屋) (ca. 82°30′E, 41°45′N) の堂内の書庫(経蔵?)に見出した多数の写本の中にあったものと思われる。[54]

気の遠くなる程の小断片を整理して、逸早く貴重な資料を江湖に知らしめたのが、リューダース(Heinrich Lüders 1869—1943)であった。[55] その夫人(Else Lüders-Peipers 1880—1945)を含めて、ドイツ探険隊のトゥルファン蒐集資料の整理・研究に多大の影響を与え、その方法は今日にまで伝承されてきている。

馬鳴の作品は、プラークリットの使用についても、特異な面を有し、ついては仏陀と大雄が共に半マガダ語(Ardha-Māgadhi)の古形を用い、最古の仏典もこれで編まれ、更に梵巴その他に翻訳されていったという、ドイツ学派の説ともいうべきものを形成した。[56]

馬鳴作であるか否かで、同じくレヴィ(Sylvain Lévi 1863—1935)との間に論争を起し、未だに決着をみない貴重なカルパナーマンディティカーの写本も、ドイツ探険隊が齎したもので、リューダースが公刊した。[57]

その後、ドイツ探険隊の将来した梵語写本は、リューダースからヴァルトシュミット(Ernst Waldschmidt 1897—)教授とその弟子たちに、研究が受け継がれてきた。ほとんどの原本が、現在は東ベルリンの学士院に保管されているが、梵文資料の整理・研究の中心はゲッティンゲンに移った。厖大な企画の一つが、梵語資料の目録作成であり、小断片をも洩らさず、精緻を極めた記述は、単なる目録というよりは、研究成果の公刊というべきである。[58] 本目録には、詳しい発見・研究史や[59]校訂出版の書誌目録も見出すことが出来て便利である。[60] 判明した典籍名も分類して列挙され、知られる部派名も示されている。[61] 正確なローマ字化原典を公表し、できるだけ多くの写真覆製を載せているのも、とくに未比定の典籍への衆

智を期待してのことである。[62] 最新巻に優に一書をなす程の語彙索引を付したのも(IV pp. 371—627)、同じ期待をこめてのものであろう。

梵語仏典の辞書の編纂も、着実に進んできている。[63] 世界に唯一つ、仏教研究委員会をもつゲッティンゲン学士院の活動に注目したい。

なお、梵文写本資料の古文字を、調査分類して、好著を出版したザーンダー(Lore Sander)博士は、目録作製に最初から大きな貢献をなしてきた。[64] いま彼女は、エンメリック(Ronald E. Emmerick)教授を輔けて、コータン語文献の古文字の調査にも力を傾けている。

大谷探険隊 ドイツ探険隊と時を同じくして、わが大谷探険隊も中央アジアに派遣される。三回に亘る調査行(一九〇二〜四年、一九〇八〜九年、一九一〇〜一四年)で、多くの困難に遭遇しながら、相当な量の資料を将来した。[65] 大半が、いま龍谷大学図書館に蔵されて、研究が推し進められていることは周知のことであろう。[66] 梵語仏典資料についていえば、旅順博物館に保管されていたものも、無事に残っている由である。[67]

ペリオの功績 スタインと並んで有名なペリオ(Paul Pelliot 1878—1945)が、一九〇六年から翌々年にかけて行なった中央アジア探険によって、各地から齎した資料の質と量は、彼の博識と語学力を遺憾なく発揮したもので、他に比類をみない。[68] 本稿では触れない、敦煌の蔵漢資料に関しても、それ自体の価値はいうまでもなく、仏教梵語文献学上も、見逃すことのできないものが多い。ペリオ蒐集の梵語資料(Fonds Pelliot sanskrit)の概要については、ポーリ(Bernard Pauly)氏が、詳細をきわめて、しかも要領よくまとめていて、ひじょうに便利である。[69] 彼が国立図書館を去って、インド学から離れてしまい、この後が期待されていただけに、惜しみても余りある。

フランスのアフガニスタン考古学調査 フランスといえば、シトロアン(André Gustav Citroën 1878—1935)が、派遣した自動車による探険隊(一九三一年)にはじまり、アフガニスタンを中心にした考古学調査団(Délégation archéologique française en Afghanistan)は、現在なお世代が替って活躍中であり、美術史・考古学の方面では、

瞠目すべき成果が多いが、文献資料については、知るところが少ない。[70]

その他にも、インド・イラン語系の仏典を、中央アジアから将来した人も少なくないが、紙幅に限りがあるので、ここでは二三の興味ある例を挙げるに止めたい。

ハンティングトン 米国の地理学者ハンティングトン(Ellsworth Huntington 1876—1947)が、一九〇五年に、カーダリックで得た僅かの断片の中に、法華経梵本の小破片があり、現在、彼が教鞭を執っていたイェール大学の図書館に蔵されていた。それが奇しくも、スタインが入手して、いま大英図書館に現存する、謂う所のカシュガル本の第二八二葉の泣き別れたものであることを知った時の筆者の興奮は、いまだに冷めぬものがある。[71] この種の例は、同じ法華経梵本の、スタイン・ペトロフスキー両蒐集写本にもある。[72]

マンネルハイム スカンディナヴィア諸国から、中央アジアに派遣された探険隊は、余り知られていないが、決して少なくない。フィンランドの英雄的な軍人マンネルハイム(Carl Gustav Emil von Mannerheim 1867—1951)も、一九〇六年から翌々年にかけての中央アジアの探険で、若干の写本類を齎している。その優れた研究も、ロイテル(Julio Natanel Reuter 1863—1937)によって公刊されているが、[73] 正確な現在処が不明である。

トリンクラー ドイツの地理学者トリンクラー(Emil Trinkler 1896—1931)が、一九二七年から翌年にかけて調査した中央アジアより将来した九葉は、カシュガル本法華経の一部(第二四四—二五二葉)であった。[74]

おわりに

かなり完備した大きなコレクションの目録をみても、いまだに研究者を待つ写本は多い。小断片には、未比定のものが、山積している。どんなコレクションが、どこにあるのかを知るだけでも容易ではない。[75] 今は、そのはしがきを、きわめて短絡に、認めたに過ぎない。

写本類には、門外不出の秘宝の如く、眠らされているものも数多い。たとえば、レーニングラードのソ連邦科学院東洋学研究所のコレクションは、若くして夭折したヴォロヒヴァ・デスヤトフスキー(V.S. Vorob'eva-Desjatovskij 1927—1956)の精力的な比定研究のあとを受けて、漸く関心は高まってきているが、[76] 世界中の文献学者たちは、それでもなお歯痒い思いを募らせている。

そこで探険家あるいは所有者の功と罪が喧しく問われる。彼らは、本来の所有国(者)から、盗賊呼ばわれさえすることがある。一方は、自分たちのおかげで、絶滅や破損から救われたと、反駁する。いずれにしても、これら仏典の写本類は、信仰の篤い人たちが遺してくれた、人類共通の文化遺産であるという原点に立たなくてはならない。

仏教梵語文献の発見史を簡略に述べて、現存する典籍の具体的な記述と書誌学的な報告を試みるべくして筆を執ったが、そのいずれも満足させ得ぬままに、与えられた紙数をはるかに逸脱してしまった。読者の寛恕を乞う次第である。一つのコレクションを、詳述すれば、優に一書を編まなくてはならないであろう。

ほかに、中央アジアのインド・イラン系の仏教典籍の成立・増広・伝播の過程、小乗・大乗・密教典籍の分類、あるいは所属の部派の決定、といった山積する難問題は、言語学その他の学際的協同の必要もさることながら、先に述べた資料の整理という出発点にも立てないでいるのが現状といえよう。基礎仏教学の構築を目指す人材の輩出を、くりかえし祈念して止まない。

付録(一) ギルギット出土の写本類

中央アジアの梵語仏典資料を考究するために、ギルギット出土の資料は重要な位置を占める。最近になって原写本の覆刻出版も出るようになり、[77] 原典の批判的な研究も着実に増えてきている。[78] 日本に古くから遺る貝葉写本断片類の中には、ギルギット系写本の古層を想わせるものさえある。小乗・大乗に加えて密教の典籍も発見されている。

付録(二) イラン語系写本類

中央アジアの梵語仏典の研究、ひいては仏教史研究の上から、イラン語系の仏典写本類の研究成果を、無視することはできない。後者の研究陣には、言語学的関心をより強くもつ西欧の学者が多い。彼らが、とくに日本の

仏教学者の協力を渇望する由縁である。[79] 多くの重要な経典類がみられるし、翻訳史の上からも興味深い問題を含んでいる。[80]

ニータン語仏典の文献学的研究は、記念すべき集大成としての、辞典の出版を江湖に送った。[81] 今後の原典批判・語彙研究に、飛躍的な発展が期待される。[82] 他の中央アジア古語仏典の文献学的研究も、活発さを増してきている。

仏教梵語文献学も、地味ながら、研究の進捗がみられる。しかし、エジャトンの文典・辞典の公刊以来、すでに三十年を過ぎて、その業績のもつ意味が、建設的に正しく評価されているだろうか。道いまだ遠し。

註

(1) 西独ゲッティンゲン大学教授ベッヒェルト (Heinz Bechert) 博士の未公刊の教授資格論文 (Habilitationsschrift) の一部を要約改稿した "Buddhist Sanskrit Literature in Sri Lanka" と題する講演（一九八二年三月二十七日国際仏教学研究所主催）の増補訂稿の早期出版が望まれる。

(2) See Hema Ratnayaka and Saddhamangala Karunaratna, *UNESCO-Sri Lanka Cultural Triangle Project——Jetavana Project——Jetavanarama Gold Plates——Prajnaparamita Sutra* (=*Publication*, No. 11) (Colombo 1983), 26 pp.

(3) Cf. e.g. Nandasena Mudiyanse, *Mahayana Monuments in Ceylon* (Colombe etc.: Gunasena, 1967), p. 83.

(4) Cf. e.g. Walter Liebenthal, "Sanskrit Inscriptions from Yünnan", *Monumenta Serica*, XII (1947), pp. 1—40, VIII plates, *Sino-Indian Studies*, V, 1 (1955), pp. 46—68, 3 plates; 汪寧生・雲南放古（昆明・雲南人民出版社、一九八〇年）および夏光南・元代雲南史地叢考（台北・台湾中華書局、一九六八年〔原稿一九三五年〕）中の図版参照。

(5) 例えば徐嘉瑞著（李家瑞校）・大理古代文化史稿（香港・三聯書店、一九七九年）、一一九三頁以下参照。Cf. also Charles Backus, *The Nan-chao kingdom and T'ang China's southwestern frontier* (Cambridge University Press, 1981) [with extensive bibliography].

(6) Cf. e.g. E. Rosner und K. Wille, "Indische Elemente in der Gründungslegende des Königreiches Nanchao", *ZDMG*, CXXXI, 2 (1981), pp. 374—383.

(7) Cf. esp. Walther Heissig, *Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache* (Wiesbaden: Otto Harraswitz, 1954), 220 pp., 18 Abb.

(8) Cf. e.g. A. Yuyama, *Indic Manuscripts and Chinese Blockprints (Non-Chinese Texts) of the Oriental Collection of the Australian National University Library* (Canberra 1967), viii, 124 pp.

(9) See e.g. *Katalog' knigam', rukopisjam' i kartam', na kitajskom', mančžurskom', mongol'skom', tibetskom' i sanskritskom' jazykax', naxodjaščimsja v' Biblioteke Azijatskago Departamenta* (Sanktpeterburg', 1843), pp. 83—95 (Tib.), 96—99 (Skt.); Otto Böhtlingk, "Über einige Sanskrit-Werke in der Bibliotek des Asiatischen Departements", *Bulletin de la Classe des Sciences hist., philol. et polit. de l'Acad. Imp. d. Sciences de Saint-Pétersbourg*, II, 22 (1845), Sp. 339—349; - -, "Verzeichnis der auf Indien bezüglichen Handschriften und Holzdrucke im Asiatischen Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften", *Das Asiatische Museum* (St. Petersburg, 1846), pp. 720—736 [Berichte bis 1844]; Anton Schiefner, "Nachträge zu den O. Böhtlingk und I.J. Schmidt verfassten Verzeichnissen der auf Indien und Tibet bezüglichen Handschriften und Holzdrucke im Asiatischen Museum...", *Bulletin...*, V (1848), Sp. 145—151; - -, "Berichte über die neueste Büchersendung aus Peking", *Bulletin...*, IX (1852), Sp. 10—14, 17—32 [=*Mélanges Asiatiques*, I, 4 (1851), pp. 405—429] / O.M. Kovalevskij, "Katalog' sanskritskim', mongol'skim', tibetskim', man'dzurskim' i kitajskim' knigam' i rukopisjam', v' Biblioteke Imperatorskago Kazanskago Universiteta xranjaščimsja", *Učenyja Zapiski* (Kazan. Univ.), 1834, II, pp. 263—292; V.P. Vasil'ev, "Die auf den Buddhismus bezüglichen Werke der Universitäts-Bibliothek zu Kazan", *Bulletin...de Saint-Pétersbourg*, XI (1854), Sp. 337——365.

(10) たとえば、西蔵撰述仏典目録（東北大学蔵版）（仙台・一九五三年）、大谷大学図書館所蔵・西蔵文献目録（京都・一九七三年）、Manfred Taube, *Tibetische Handschriften und Blockdrucke*, I—IV (Wiesbaden, 1966); etc.

(11) 東北目録六七七四番、大谷目録一三〇一一番。

(12) 石嶺稙・天山南路を往く シルクロード 絲綢之路千里（東京・講談社、一九七九年）、三〇—三一頁。

(13) Cf. Bernhard Kölver, "Das Nepal-German Manuscript Preservation Project: Bericht über die zwei ersten Kampagnen", *ZDMG*, CXXIII, 1 (1973), pp. *1*—*10*; "Wissenschaftlichen Nachrichten: Anlage 7—Bericht über das Nepal-German Manuscript Pre-

servation Project für den Zweitraum vom April 1976—Juli 1977", *ZDMG*, CXXVIII, 1 (1978), pp. *14*—*16*.

(14) フォークト (Wolfgang Voigt 1911—1982) 博士の亡き後、ハンブルク大学のヴェッラー (Albrecht Wezler) 教授が企画責任者となり、精力的な推進を図りつつある。彼の詳細な報告が、ドイツ東洋学会誌の補巻に、近く掲載される筈である。

(15) See Claus Vogel, "The Dated Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra", *NAWG*, Philol.-hist. Klasse, 1974, p. 201. 年代計算法は、ペテク (Luciano Petech) やレーグミ (D.R. Regmi) など、それぞれ異なるが、この写本をあとの両者は見ていない。Cf. Ryōtai Kaneko and Yoshihiro Matsunami, "A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possesion of the Toyo Bunko", *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, XXXVII (1979), p. 161 [No. 3-A].

(16) Rāhula Sāṅkṛtyāyana, "Sanskrit Palm-leaf MSS. in Tibet", *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, XXI, 1 (1935), pp. 21—43, plates on 2 pp. [Expedition 1929—1930]; "Second Search of Sanskrit Palm-leaf MSS. in Tibet", *ibid.*, XXIII, 1(1937), pp. 1—57, plates on 7 pp. [Expedition 1936]; "Search for Sanskrit MSS. in Tibet", *ibid.*, XXIV, 4 (1938), pp. 137—163 [Expedition 1938]. 彼が将来した複写本・写真などが、パトナ博物館内のジャヤスワール (K.P. Jayaswal) 研究所に保存されているが、詳細な目録や写真複刻の出版の一日も早いことを祈る。なお、平川彰「ヨーロッパの中央アジヤ仏教写本」印仏研、十ノ一 (一九六二年)、三一四—三三頁参照。

(17) 北京発行の中国画報、一九八二年五月号 (漢日両版共)、六頁参照。

(18) Sāṅkṛtyāyana, *JBORS*, XXI, 1 (1935), p. 30 [Sposkhaṅ Monastery].

(19) "Notices of the Languages, Literature, and Religion of Nepal and Tibet", *Asiatick Researches*, XVI (1828), pp. 409—449 (with 10 pl.); "Sketch of Buddhism, derived from the Buddha scriptures of Nepal", *Transactions of the Royal Asiatic Society*, II (1828), pp. 222—257 (with Appendix V).

(20) Jones, "The Third Anniversary Discourse, delivered 2 February 1796", *AR*, I (Calcutta 1888), p. 422 f.

(21) "Abstracts of the Contents of the Dul-vá, or First Portion of the Kāh-gyur", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, I (1832), pp. 1—8, 375—392.

(22) *Papiers d'Eugène Burnouf conservés à la Bibliothèque Nationale*. Catalogue dressé par Léon Feer (Paris: H. Champion, 1899), p. 148.

(23) cf. *Ibid.*, p. 157; 定方晟「パリ国立図書館所蔵のサンスクリット写本とその目録」印仏研、十四ノ二 (一九六六年)、八四二 (一五五) 頁の注12参照。

(24) Burnouf, *Introduction à l'histoire du Buddhisme indien*, I (Paris: Imprimerie Royale, 1844), v, 647 pp., Deuxième éd. (Paris: Maisonneuve, 1876), XXXVIII, 587 pp.; *Le Lotus de la Bonne Loi* (Paris: Imprimerie Nationale, 1852), v, iv, 897 pp., Nouvelle ed. (Paris: Maisonneuve, 1925), v, iv, iv, 897 pp.

(25) 中国の調査は、中国社会科学院・北京大学の南亜研究所長・季羨林博士の指導の下に、推進されている由である。インド・イラン語系仏典に関する報告の事書を寡聞にして知らない。最近刊の次著一点のみを紹介しておこう。新疆社会科学院考古研究所編・新疆考古三十年 (ウルムチ・新疆人民出版社、一九八三年)、三、五、七九六頁、三〇九図版他多数挿画。

(26) ソ連領中央アジアの調査については、個々の発表も決して少なくない。少し古いが、次の三点を挙げるに止める。V.M. Masson, *Archaeological Study of Soviet Central Asia* (Moscow: Nauka, 1968), 30 pp.; I. S. Braginsky, L.M. Landa and N.A. Khalfin, *Central Asia and Kazakhstan in Soviet Original Studies* (Moscow, 1968), 39 pp.; Grégoire Frumkin, *Archaeology in Soviet Central Asia* (Leiden-Köln: E. J. Brill, 1970), XVIII, 217 pp., LXVII plates, 39 figs., 19 maps.

(27) カシュガル総領事時代に買い集めたペトロフスキー (N.F. Petrovskij 1837—1908) のレーニングラードに保管されるコレクションを中心にした記述は、ボンガルド・レーヴィン博士が各所で発表しているが、次の一点を挙げておこう。G.M. Bongard-Levin, *Studies in Ancient India and Central Asia* (Calcutta: Indian Studies Past and Present, 1971), pp. 229—237: "New Buddhist Texts from Central Asia".

(28) Boris Stavisky, "Buddhist Monuments of Ancient Merv", *Buddhist for Peace*, III (Ulan Bator, 1980), pp. 29—33.

(29) たとえば、深田久弥・中央アジア探険史 (東京・白水社、一九七一年) (第七刷一九八〇年) 中の、「近代中央アジア探険年表」(五四三—五五八頁) 参照。

(30) 中央アジアの仏典写本類の言語、文字、材料、書写具、型、年代などについては、井ノ口泰淳「シルクロード出土の仏典」シルクロードと仏教文化 (東京・東洋哲学研究所、一九七九年)、一八一—二一八頁 (東洋学術研究、十七—六・十八—一 (一九七八年十一月・一九七九

年一月刊）初収」参照。なお、中央アジアの仏教考古学・文化史あるいは仏教典籍については、*Encyclopaedia of Buddhism*, IV, 1 (Colombo, 1979) 所収の次の二項目が、簡にして要を得た好論文である。惜しむらくは、脱稿後出版までに長年月を経たこと、編集面での不行届などのあることに、注意を払う必要があろう：B.A. Litvinsky, "Central Asia", pp. 21 b—52 b; Lore Sander, "Buddhist Literature in Central Asia", pp. 52 b—75 b.

(31) *The Bower Manuscript: Facsimile Leaves, Nagari Transcript, Romanized Transliteration and English Translation with Notes* (Archaeological Survey of India), 3 parts (Calcutta: Superintendent Government Printing, 1893—1912), xcviii, 1—152, 153—401 pp.; LIV plates (+1 p.) [incl. 31 figs., IV maps, V tables] (Reprinted in New Delhi, 1983).

(32) この貴重な歴史的発見を、当時のベンガルのアジア協会長 (J. Waterhouse) に宛てた書簡（一八九〇年九月一五日付）が、大谷大学に保管されているのは興味深い。これは一九二〇年三月に偶々、泉芳璟 (1884—1947) がケンブリッジの有名な古書肆 Heffer（現在は新刊書のみ扱かう店）で求めたくルンレ文庫の中にあったものらしい。彼の「西域発掘の梵語古経典——くルンレ文庫を回顧して——」仏教研究、三ノ四（大谷大学、一九二二年）、一一三（五七九）—一二四（五九〇）頁も、好い案内である。因みに、先の書簡は、該誌同号の巻頭の写真に掲げられている。

(33) Cf. e.g. Sven Rinman, "Förteckning över Sven Hedin tryckta skrifter", *Hyllningsskrift tillägnad Sven Hedin* [Seventieth Birth Anniversary Volume] (Stockholm, 1935), pp. 1—21; also *Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin (The Sino-Swedish Expedition)* (Stockholm: The Sven Hedin Foundation / Statens Etnografiska Museum): Publication, I (1937)—.

(34) H.W. Bailey, "Gāndhārī", *BSOAS*, XI, 4 (1946), pp. 764—797, esp. p. 764 f.

(35) Brough, *The Gāndhārī Dharmapada* (London: Oxford University Press, 1962), xxv, 319 pp., XXIV plates.

(36) 「大唐西域記」巻十二・大正蔵、二〇八七番、五十一巻九四三頁下欄一四行。

(37) *Ancient Khotan: Detailed Report of Archaeological Explorations in Chinese Turkestan*, carried out and described by M. Aurel Stein, Vol. I (Oxford at the Clarendon Press, 1907; reprinted by Hacker Art Books, New York, 1975), pp. 185 ff., esp. p. 188,

(38) Cf. e.g. D.I. Edel'man, *Dardskie Jazyki* (Moskva, 1965), 203 pp. ('Bibliograph', pp. 200—202); also Graham E. Clark, "Who were the Dards? A Review of the Ethnographic Literature of the North-Western Himalaya", *Kailash*, V, 4 (1977), pp. 323—356 ('Bibliography', pp. 347—356).

(39) Cf. e.g. Franz Bernhard, "Gāndhārī and the Buddhist Mission in Central, Asia", *Añjali* (Wijesekera Volume) (Peradeniya, 1970), pp. 55—62.

(40) スタインの旅行記や報告書はよく知られているので、最近の興味深い伝記を一つ紹介しておきたい。Jeannette Mirsky (1903—), *Sir Aurel Stein: Archeological Explorer* (Chicago-London: University of Chicago Press, 1977), xiii, 585 pp., photos, maps, frontisp.

(41) See Stein, *Ancient Khotan*, I, p. 256 f.

(42) See Stein, *op. cit.*, I, pp. 288—303: "List of Objects excavated or found at Dandān-Uiliq", esp. pp. 294—297, 299.

(43) See Stein, *op. cit.*, I, pp. 438—440: "List of Antiques from Endere Ruins"; cf. also *op. cit.*, II: Plates.

(44) See esp. *Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Īrān*, carried out and described by Aurel Stein, Vol. II: Text (Oxford at the Clarendon Press, 1928): Appendix E "Inventory List of Manuscript Remains mainly in Sanskrit", by F.E. Pargiter, pp. 1017—1025; Appendix F "Inventory List of Manuscript Remains in Sanskrit, Khotanese and Kuchean", by Sten Konow, pp. 1026—1028; Appendix G "Notes on Manuscript Remains in Kuchean", by Sylvain Lévi, p. 1029 f.; Appendix H "Notes on Manuscript Remains in Sogdian", by E. Benveniste, p. 1031; Appendix K "Inventory List of Manuscript Fragments in Uighur, Mongol, and Sogdian", pp. 1047—1049; Appendix R "Notes on the Tibetan Manuscripts Illustrated in Plates CXXX—CXXXIII", by F.W. Thomas, pp. 1084—1090.

(45) 敦煌文書の発見・入手の経緯については、次の詳細かつ正確な論考は不可欠のものである。梅村坦「敦煌探険・研究史」講座敦煌、I（東京・大東出版社、一九八〇年）、一一七—一二四頁。なお、金岡照光・敦煌の文学（東京・大蔵出版社、一九七一年）、とくに一一八五頁「敦煌の写本」参照。

(46) 法華経典については、本号所収の戸田宏文教授の論文を参照されたい。今は拙著を引用しておくに止める。*A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Canberra, 1970), pp. 23 ff.

(47) See e.g. *Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*, carried out and described by Aurel Stein, Vol. VI (Oxford at the Clarendon Press, 1921), Map Sheet No. 31.

(48) *Serindia*, Vol. III: Text (Oxford, 1921), pp. 1432—1459: Appendix F "Inventory List of Manuscripts in Sanskrit, Khotanese and Kuchean", prepared by A.F. Rudolf Hoernle: —I. "Manuscript Remains Recovered from Khādalik' (pp. 1432—1447); II. 'Documents on Wood and Paper, in Khotanese, from Mazār-Toghrak Site' (p. 1447); III. "Manuscript Remains in Sanskrit, Kuchean, Khotanese from Sites of Mīrān, Yār-Khoto, Shōrchuk, Khōra' (p. 1448); IV. "Manuscripts in Sanskrit, Khotanese, and Kuchean from Walled-Up Chapel of Ch'ien-fo-tung, Tun-huang' (pp. 1448—1455); V. 'Remains of Pōthīs and Documents in Sanskrit and Khotanese, from Sites of Farhād-Bēg-Yailaki and Kara-Yantak'. (p. 1455 f.); VI. 'Remains of Pōthīs and Documents, mainly in Khotanese, from Ruined Fort on Mazār-Tāgh' (pp. 1456—1459)

(47) August Friedrich Rudolf Hoernle, *Manuscript Remais of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan. Facsimiles of Manuscripts in Sanskrit, Khotanese, Kuchean, Tibetan and Chinese with Transcripts, Translation and Notes*, edited in conjunction with other scholars with critical introductions and vocabularies, Vol. I (Oxford, 1916) [Reprinted by Ad Orientem, St. Leonards and Philo Press, Amsterdam, 1970), xxxvi, 412 pp., XXII plates. この著書くの執筆陣は' Lionel D. Barnett, Emmanuel-Edouard Chavannes, Sten Konow, Sylvain Lévi, Heinrich Lüders, F.E. Pargiter, F.W. Thomas といった錚々たる学者である。彼らが個々に研究発表した論文も多く' 限られた紙数には列挙できない。

(50) たとえば「新に発見せられた西域語聖典の研究」新仏教' 九ノ四（一九〇八年）をはじめとして' 渡辺海旭論文集（東京・嘉月全集刊行会' 一九三三年）所収の数点の論文を参照されたい。

(51) *A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the Sacred Canon of the Buddhists in China and Japan*, compiled by Bunyiu Nanjio (Oxford at the Clarendon Press, 1883) [その後いく度か各地で覆刻出版されている。たとえば最近の増補訂版には' Lokesh Chandra (New Delhi, 1980) があるが' 常盤大定・荻原雲来編の「大蔵経聞条目録補正索引」（東京' 一九三〇年）を見ていない。]

(52) 両隊長の報告書や旅行記の数も多いが' この点では次

著が' 「インド仏教美術」（一八九三年）で名声を博したグリュンヴェーデルの' 面目躍如たるものである。*Alt-Kutscha: Archäologische und religionsgeschchtliche Forschungen an Tempera-Gemälden aus Buddhistischen Höhlen der ersten acht Jahrhunderte nach Christi Geburt* (*Veröffentlichung der Preussischen Turfan-Expeditionen*) (Berlin: Otto Elsner, 1920), v, 89, 124 pp., 89 Figs.; 49 Tafeln. 四回に亘る報告書のみ列挙しておこう。A. Grünwedel, *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902—1903* (=*Abhandlungen d. philos.-philol. Klasse d. Bayer. Ak. d. Wiss.*, XXIV, 1 (1906), 196 pp., XXXI Tafeln [I. Expedition]; A. von Le Coq, *Chotscho: Facsimile-Widergabe der wichtigeren Funde der ersten Königlich Preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan* (*Ergebnisse der Kgl. Preussischen Turfan Expeditionen*) (Berlin: D. Reimer, 1913), VII, 18 pp., 75 Tafeln [Repr. Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1979, mit Anhang zum Neudruck von H.G. Franz, pp. 19—24] [II. Exp.]; ——, *Auf Hellas Spuren in Ostturkistan: Berichte und Abenteuer der II. und III. Deutschen Turfan-Expedition* (Leipzig: J.C. Hinrich, 1926), XI, 108 Abb., 52 Tafeln, 4 Karten [Repr. Graz, 1974]=*Buried Treasures of Chinese Turkestan: An Account of the Activities and Adventures of the Second and Third German Turfan Expeditions*, translated by Anna Barwell (London: George Allen & Unwin, 1928), 180 pp., 52 pl., 6 figs.; A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesische-Turkistan: Bericht über archäologische Arbeiten von 1906 bis 1907 Bei Kuča, Qarašahr und in der Oase Turfan* (*Königlich Preussische Turfan-Expeditionen*) (Berlin: Georg Reimer, 1912), 371 pp., 1 Tafel, 678 Figs. [III. Exp.]; A. von Le Coq, *Von Land und Leuten in Ostturkistan: Berichte und Abenteuer der 4. Deutschen Turfanexpedition* (Leipzig: J.C. Hinrich, 1928) [Repr. Leipzig: Zentralantiquariat d. DDR, 1982), VII, 183 pp., 36 Textabbildungen, 48 Tafelabb., 5 Karten.

(53) Sten Konow, *Das indische Drama* (Berlin-Leipzig: Walter de Gruyter, 1920), §19, 59; 馬鳴の作品については' 参考文献を巻末に付して詳細に論じた' 辻直四郎・サンスクリット文学史（岩波全書' 一九七三年）' 十一節参照。

(54) See von Le Coq, *Auf Hellas Spuren in Ostturkistan*, p. 115 (Eng. ed. p. 126), Tafel 35; この地点の詳しい報告は' クテインの第四回探検隊（一九一七

～二九）にも参加して、西域考古地理に造詣の深い黄文弼（一八九三～一九六六）・塔里木盆地考古記（北京・科学出版社、一九五八年）、付図十六―十八を参照。文献学的には、彼の「吐魯番考古記」（同、一九五四年）を見逃せない。同じく「西北史地論叢」（上海人民出版社、一九八一年）を参照されたい。

(55) *Bruchstücke buddhistischer Dramen* (=*Königlich Preussische Turfan-Expeditionen: Kleinere Sanskrit-Texte*, I) (Berlin: Georg Reimer, 1911), 89 pp., VI Tafeln [Reprint (=*Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie*, I) (Wiesbaden: Franz Steiner, 1979)].

(56) Lüders, *op. cit.*, p. 40 f.; – –, "Epigraphische Beiträge, III", *SPAW*, 1913, LIII, p. 1003 [=*Philologica Indica* (Göttingen, 1940), p. 288]; – –, *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons* (Berlin: Akademie-Verlag, 1954); cf. S. Lévi, "Observations sur une langue précanonique", *JA*, 1912, p. 511; しかし、拙稿「仏典の編纂に用いられた言語の特質」奥田先生記念論集（京都、一九七六年）、八七三―八八七頁参照。

(57) *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (=*Kleinere Sanskrit-Texte*, II) (Leipzig: DMG in Komm. bei F.A. Brockhaus, 1926), VI, 208 pp., 2+12 Tafeln [Reprinted with *KST*, I in 1 vol. (1979)]. なお、辻・前掲書、九節ノ二参照。

(58) *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, unter Mitarbeit von Walter Clawiter [I–III] und Lore Sander (-Holzmann) herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Ernst Waldschmidt, 4 Teile (=*Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland*, X, 1—4) (Wiesbaden: Franz Steiner, 1965–68–71–80). 写本といっても、厳密には木版刷本も若干含まれている。Cf. e.g. Annemarie von Gabain, *Die Drucke der Turfan-Sammlung* (Berlin: Akademie-Verlag, 1967), 40 pp., XIV Tafeln.

(59) See Waldschmidt, *op. cit.*, I, pp. I—XXXV.

(60) See *ibid.*, I pp. XXVI—XXXII, III p. 275 f., IV p. 353 f. なお、長らく絶版であったリューダースの二著〔上記注（55）（57）〕同様、ザァルトシュミットの二著（*KST*, III—IV）も、同じ叢書の第二巻（一九七九年）として、合冊出版されたのは厳ばしい。また、ザァルトシュミットの校訂本 *Catuṣpariṣatsūtra* (Berlin, 1952–57–62) の英訳書が、書誌目録に欠けているので、つけ加えておきたい。*The Sūtra on the Foundation of the Buddhist Order*, translated by Ria Kloppenborg (=*Nisaba*, I) (Leiden: E. J. Brill, 1973), XVI, 123 pp.

(61) *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil IV, bearbeitet ven L. Sander und E. Waldschmidt (1980), pp. 355—362: "Übersicht über die Handschriften nach dem Inhalt, Teil 1—4"—A. Buddhistische Literatur, 1: Ordenszucht (Vinaya), 2: Lehrtexte (Sūtra), 3: Verssammlungen und Erzählungen, 4: Abhidharma, Lehrbegriffe, Kommentare, Yoga, 5: Kultus, 6: Mahāyāna-Sūtras, 7: Schöne Literatur; B. Wissenschaftliche Literatur, 1: Schriftlehre und Grammatik, 2: Metrik, 3: Astronomie und Astrologie, 4: Medizin. これらの中から、批判的校訂出版を挙げるだけでも相当な紙数を要するので、前註の書誌目録を参照されたい。

(62) 写真複刻は、この意味できわめて重要であるが、紙価の騰貴を呼び困難があり、マクロフォーム化が検討されている。次の叢書も残念ながら廃刊となってしまった。*Indo-Iranian Facsimiles Series*, I: *Faksimile-Wiedergaben von Sanskrithandschriften aus den Berliner Turfanfunden*, I: *Handschriften zu fünf Sūtras des Dīrghāgama*, unter Mitarbeit von W. Clawiter, D. Schlingloff und R.L. Waldschmidt herausgegeben von E. Waldschmidt (The Hague: Mouton, 1963), 59 pp., CLXXVI Tafeln.

(63) *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, begonnen von E. Waldschmidt. Im Auftrage der Akademie der Wissenschaften in Göttingen herausgegeben von Heinz Bechert und bearbeitet von Georg von Simson (Göttingen: Vandenhoek & Ruprecht, 1973–)〔既刊三分冊〕

(64) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung* (=*Verzeichnis...*, Supplementband, VIII) (Wiesbaden: Steiner, 1968), XI, 203 pp., 41 Tafeln.

(65) 香川黙識編・西域考古図譜（東京・国華社、一九一五年）〔再刷・東京・相林社、一九七二年〕、下巻、写本の部にインド・イラン系言語の断片類が見出せる〔西域語文書二〇ノ一―二は梵文法華経＝「西域文化研究」（次註参照）第四巻、図版第二〕。大谷探検隊の詳細な報告は、上原芳太郎編・新西域記、二巻（東京・有光社、一九三七年）参照。同書所収（第二巻）「関東庁博物館大谷家出品目録」（二三頁上、六八七―六九七番）に新疆出土の法華経梵本断片二七一葉が報告されている。藤枝晃「大谷コレクションの現状」りゅうこく、一九号（一九七八年）、六―九頁参照。

(66) 「西域文化研究」全六巻七冊（京都・法蔵館、一九五八―六三年）のうち、第四巻「中央アジア古代語文献」二冊（一九六一年）が、インド・イラン語系仏典を扱かっている。石浜純太郎「西域古代語の仏典―研究の回顧と展望―」（九一四八頁）、真田有美「大谷探検隊将来梵

文仏典資料」(四九—一一八頁)〔ネパール系梵本も含む〕、真田有美・清田俊雪「ペトロフスキー本法華経の研究」(一一九—一七〇頁)、井ノ口泰淳「トカラ語及びウテン語の仏典」(別冊三—一七—三八八頁))。

(67) Cf. e.g. Yuyama, *Bibliography...Sp* (1970), p. 32, 50 f. 大谷探検隊将来の梵本に関しては、不明な点があるので、旅順に遺る写本(上記注65末)の一日も早く披見できるのを期待したい。

(68) ペリオの探検については、審らかにしない点が多いが、論考は貴重である。秋山光和「ペリオ調査団の中央アジア旅程とその考古学的成果」仏教芸術一九号(一九五三年十月))、八二—九六、二〇号(一九五三年十二月)、五六—一七〇頁。ペリオの業績は、未だに遺稿が出版されてきているが、次の追悼文集も参考になる。*Paul Pelliot*, publié par la Société Asiatique (Paris, 1946), 79 pp., 1 frontisp., esp. Paul Demiéville, "La carrière scientifique de Paul Pelliot et son œuvre relative à l'Extrême-Orient", pp. 29—54.

(69) "Fragments sanskrits de Haute Asie (Mission Pelliot)", *JA*, CCLIII, 1 (1965), pp. 83—121 (with extensive bibliographical notes). この論文は、ペリオ蒐集の梵文写本を、あらゆる角度から、参考資料を広く駆使して記述したもので、中央アジア梵語仏典類の批判的概説というべきものである。同題の論文が、該誌に断続的に載っているが、知るのが困難なので、列挙しておこう。*Journal Asiatique*, CCXLV, 3 (1957), pp. 281—307 [=*Manuscrits de Haute Asie conservés à la Bibliothèque Nationale de Paris* (*Fonds Pelliot*) (abbr. MHA), V (1958), 27 pp., V planches]; CCXLVII, 2 (1959), pp. 203—249 [=*MHA*, VII (1960), 47 pp., V pl.]; CCXLVIII, 2 (1960), pp. 213—258 [=*MHA*, XII (1961), 46 pp., 25 pl.]; CCXLVIII, 4 (1960), pp. 509—538 [=*MHA*, IX (1961), 30 pp., IV pl.]; CCXLIX, 3 (1961), pp. 333—410 [=*MHA*, XII (1962), 78 pp., XI pl.]; CCL, 4 (1962), pp. 593—612 et CCLII, 1—2 (1964), pp. 197—271 [=*MHA*, XIII (1965), 95 pp., XXIV pl.]; CCLIV, 2 (1966), pp. 245—304; CCLV, 2 (1967), pp. 231—241. 別刷本には、図版が加わって、貴重である。

(70) Cf. e.g. Sylvain Lévi, "Note sur des manuscrits sanscrits provenant de Bamiyan (Afghanistan), et de Gilgit (Cachemire)", *JA*, 1932, pp. 1—45, 4 pl.: I. 'Manuscrits de Bamiyan (Mission Hackin)' (pp. 1—13). これは一九三〇年に発見されたもの。Cf. Joseph Hackin (1886—1941), *Nouvelles Recherches Archéologiques à Bāmiyān* (=*Mémoires de la D.A.F.A.*, III) (Paris: G. van Oest, 1933), p. 37. —B. Pauly, "Fragments sanskrits d'Afghanistan (Fouilles de la D.A.F.A.)", *JA*, 1967, pp. 273—283, IV pl. 一九六六年に発見されたようであるが、調査報告が定かでない。発見地点は確かである。Cf. A. Godard, Y. Godard et J. Hackin, *Les Antiquités Bouddhiques de Bāmiyān* (=*MDAFA*, II) (Paris-Bruxelles: G. van Oest, 1928), pl. II b.

(71) For bibliographical details see A. Yuyama and H. Toda, *The Huntington Fragment F of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Tokyo: The Reiynkai Library, 1977), iv, 10 pp., 2 pl.

(72) たとえば「西域文化研究」四巻、図版第六参照。

(73) "Some Buddhist Fragments from Chinese Turkestan in Sanskrit and 'Khotanese'", *Across Asia from West to East in 1906—1908*, by C.G. Mannerheim, Vol. II (=*Société Finno-Ougrienne: Travaux Ethnographiques*, VIII) (Helsinki, 1940), 35 pp. (incl. IX plates on pp. 27—35) [cf. *Journal de la Soc. F.-Ougr.*, XXX(1913—18), p. 37].

(74) Cf. Heinz Bechert, "Über die ,Marburger Fragmente' des Saddharmapuṇḍarīka (Mit einem Beitrag von Jongchay Rinpoche)", *NAWG*, philol.-hist. Klasse, 1972, 1, pp. 1—81.

(75) 小規模なコレクションにもなると、尚更のことである。Cf. e.g. A.F. Rudolf Hoernle, "The Weber MSS.—Another collection of ancient MSS. from Central Asia", *JASB*, LXII, 1 (1893), pp. 1—40, IV pl. 望まれるのは、むしろ仏教梵語仏典の分野や典籍類を、系統的に分析した書誌学的な研究であろう。この点で、ゲッティンゲン学士院の企画に注目したい:*Systematische Übersicht über die buddhistische Sanskrit-Literatur*. Im Auftrage der Akademie der Wissenschaften in Göttingen herausgegeben von Heinz Bechert, I (Wiesbaden: Steiner, 1979-).

(76) Cf. e.g. *Problemy istorii jazykov i kul'tury narodov indii* (*Pamjati V.S. V.-D.*) (Moskva: Nauka, 1974), pp. 8—11: "Bibliografiya trudov—V. S. V.-D.", pp. 12—19: G.M. Bongard-Levin i E.N. Temkin, "Raboty V.S. Voro'eva-Desjatovskogo i issledovanie buddijskix tekstov iz kollekcii N.F. Petrovskogo".

(77) E.g. *Gilgit Buddhist Manuscripts* (*Facsimile Edition*), edited by Raghu Vira and Lokesh Chandra, 10 Parts (=*Śatapiṭaka Series*, X, 1—10) (New Delhi, 1959—1974).

(78) For further details see esp. Oskar von Hinuber, "Die Erforschung der Gilgit-Handschriften", *NAWG*, philol.-hist. Klasse, 1979, 12 pp. 327—359; – –, "Wissenschaftliche Nachrichten", *ZDMG*, CXXX, 2 (1980), pp. *25*—*26*, *ibid.*, CXXXI, 2 (1981), pp.

9—*11*; – –, "Die Bedeutung des Handschriftenfundes bei Gilgit", *ZDMG*, Suppl. V (1982), pp. 47—66.

(79) 紙数を余りに超過したので，幸いに次の二書を参照されたい。Ronald E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khotan* (Tokyo: The Reiyukai Library, 1979), vii, 63 pp.; David A. Utz, *A Survey of Buddhist Sogdian Studies* (Tokyo, 1978), iv, 26 pp. 同じ要領で，いわゆるトカラ語およびウイグル語の仏典についても，同叢書に収める計画である。

(80) 中央アジアの仏教文献学・仏教史学に関心をもつ学徒にとって，次の近刊の三論文集は見逃せません。*Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, edited by J. Harmatta (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1979), 359 pp.; *Manuscrits et inscriptions de Haute Asie du Ve au XIe siècle* (= *JA*, CCLXIX, 1—2: Numéro spécial, 1981), IX, 407 pp., incl. pl., figs. carte; *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, herausgegeben von Klaus Röhrborn und Wolfgang Veenker (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983), VII, 142 pp.

(81) H.W. Bailey, *Dictionary of Khotan Saka* (Cambridge University Press, 1979), xvii, 559 pp. (cf. R.E. Emmerick, *Guide*, p. 12 f., *IIJ*, XXIII, 1981, pp. 66—71; but Bailey, *Annual of Armenian Linguistics*, IV, 1983, p. 1).

(82) Cf. e.g. R.E. Emmerick and P.O. Skjaervφ, *Studies in the Vocabulary of Khotanese* (=*Sitzungsb. d. Österr. Akad. d. Wiss., Philos.-hist. Klasse*, 401) (Wien, 1982), 133 pp.

（ゆきも ゆきら・国際仏教学研究所長）